

温暖化と樹木の病害虫に関する研究（2）

予算区分：県 単	研究期間：令和6年度～8年度	担 当：森林科学係 北 野 皓 大
----------	----------------	-------------------

カシノナガキクイムシモニタリング調査（4）

I はじめに

「ナラ枯れ」は、カシノナガキクイムシ（以下、カシナガ）が繁殖のため材内に穿入し、その際に持ち込まれる病原菌（*Raffaelea quercivora*）通称「ナラ菌」によってミズナラやコナラをはじめとするブナ科の樹木（ブナ属を除く）が枯死する伝染病である。本県では、2010年にみなかみ町湯桧曾で被害が初めて確認された。2014年に被害はなくなったが2015年に再び発生し、以後は拡大傾向にある。被害の拡大により、森林景観の喪失、民家や電線、道路への倒木被害の発生、水源涵養や土砂災害防止等の森林の公益的機能の低下等、様々な影響が懸念されている。また、カシナガは在来種であることから、県内各地に生息している可能性がある。

本研究では、ナラ枯れ被害地であるみなかみ町で生息状況を把握し被害発生予測及び被害拡大傾向を分析した。さらに分布範囲や密度を把握することを目的として、県内複数箇所にて定点観測調査を実施した。

II 方 法

モニタリング調査は、みなかみ町内21箇所、前橋市、渋川市（2024年のみ）、藤岡市、下仁田町、高山村、太田市、桐生市、榛東村（県林業試験場内）各1箇所の計29箇所で行った。なお、無被害地では被害拡大を防ぐためスギ林内を調査地とした。トラップは透明な衝突板式トラップ（サンケイ化学(株)）に、集合フェロモン（カシナガコール：サンケイ化学(株)）、75%エタノール誘引剤を各1つずつ設置した（図-1）。衝突板式トラップの捕虫部には保存液としてプロピレングリコールを注いだ。調査期間は2024年5月8日から2024年12月13日として、月1回の回収を行った。捕殺した虫をカシナガとその他（ルイスナガキクイムシ、ヨシブエナガキクイムシ等）に分別し、雌雄を判別して計測した。



図-1 衝突板式トラップ

III 結果及び考察

調査の結果、29箇所中24箇所ではカシナガが捕獲され、2023年の結果と比較し5箇所増加した（表-1）。みなかみ町の21箇所では、2023年まで利根川沿いを中心に南下している傾向が見られたが、2024年は猿ヶ京方面でのトラップ（調査地14～21）でカシナガが捕獲され、南下だけでなく東西にも生息域が拡大していると考えられた。みなかみ町内でナラ枯れは、これまでのように利根川沿いを中心に拡大しつつ、東西のナラ林へと被害が拡大していくことが懸念される。

その他の群馬県各地の調査箇所では、下仁田町以外の調査地でカシナガが捕獲されており、どの地域でも2024年の捕獲頭数が増加し、特に榛東村の捕獲が186頭と多い。榛東村では、未だナラ枯れの

発生は確認されていないため警戒が必要である。下仁田町では捕獲されず、周辺にカシナガは生息していないことが考えられた。渋川市でもカシナガが捕獲されたことから、赤城山周辺では広く生息している可能性がある。

渋川市と前橋市で捕獲されたカシナガの由来が、みなかみ町方面から南下したか、太田市や桐生市方面から北上したかを解析することで、県内のカシナガ拡大過程が明らかになるため、継続調査により把握し今後の被害啓発に活用したい。

表－1 モニタリング調査調査結果（2021年～2024年）

調査地	2024	2023	2022	2021	調査地	2024	2023	2022	2021
1 湯檜曾	9	1	0	0	15 相俣	12	0	0	0
2 幸知	0	1	0	0	16 永井	1	1	0	0
3 谷川	71	65	129	236	17 姉山	0	0	1	0
4 阿能川	3	0	0	0	18 入須川	9	2	9	9
5 湯原	5	0	0	0	19 師田	1	0	0	0
6 小日向奥	9	8	9	0	20 羽場	1	0	0	0
7 小日向	19	12	11	41	21 下津	3	0	0	0
8 カップ	8	5	9	2	22 高山	0	0	4	0
9 寺間	29	23	31	24	23 渋川	5	—	—	—
10 カルチャ	0	4	17	12	24 前橋	8	3	1	1
11 下牧	9	4	19	7	25 桐生	22	8	18	2
12 後閑	10	2	4	0	26 太田	129	76	—	—
13 小川	15	12	47	18	27 藤岡	24	31	3	1
14 新巻	5	0	1	1	28 下仁田	0	0	0	0
					29 榛東村	186	191	101	43



図－2 調査結果